市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会
会長　大橋秀一郎

No.12　平成5年11月1日発行　編集：総務委員　矢倉　睦

クワウンナイ川より
トムラウシ山へ

上田忠士

クワウンナイ川は全長18km、大島亮吉氏の紀行文により広く知られ、多くの岳人の心を奪い続けている北海道を代表する美しい沢だ。トムラウシ山は標高2,141m、2つの美しい山上湖を有す独立峰。豊富な高山植物があるが、どこから登っても山中泊を要す奥深い山である。トムラウシとは、「花の多い所」というアイヌ語である。私がこの沢にチャレンジするのは2年越の夢であった。

8月5日（晴）

山仲間4人、ニッサンサファリーで15：00札幌を出発。旭川を経由して天人峡へ向かう。クワウンナイ川入口の公共駐車場に幕営。他パーティー1張あり。夜はジンギスカンとビールで明日からの好天を期待して乾杯。就寝21：00。

8月6日（晴）

起床4：00。沢登りスタイルで出発5：40。荷物は12〜13kgか。ポンクワウンナイ川との出合の渡渉は靴を濡らす程度。クワウンナイ川左側を進み、最初の渡渉手前で登山靴から沢用靴に履き替えた。この最初の渡渉で水量を判断し、決行を決心する。水温は低く、ももまでの水位、流れも速い。

渡渉を繰り返し進む。約2時間で函に出会う。ここは高度感ある左側をへつる。緊張するところだ。フィックスロープあり。あとは川床あり、巻き道あり、沢勘を働かせて進む。何しろ長い。地図を見ても自分がどこを遡行しているのか分からない。高度計、見える尾根、沢の曲がり具合で判断するだけである。

途中左にまっすぐで明瞭な踏み跡があり、笹を両手で引っ張って直登約20m、かなり急だ。登り切って小さな尾根を乗越して再び沢に降りたが、後続パーティーが沢沿いに登ってきて大損をした。ここは水量の多い時の巻き道であろうと苦笑いする。ドンドン進み、カウン沢出合に到着したのは14：15。テント4－5張

あり。我々はさらに巨岩帯の本沢をつめ、ブッシュこぎもして魚止の滝に到着、15：25。第1日目の行程が予定通り終了、ホッとする。ここに幕営。

早速持参した釣り道具を出して滝壺でオショロコマ釣りを始める。ほんとによく釣れる。ここの魚は札幌から持参した高級エサ「イクラ」は食べたことがないのであろうか？　リリースしたり茨城から来たという3人パーティーにプレゼントした。我々も1人3匹程度、下ろし、塩味をしてフライパンで料理。ビールで乾杯。ウマイこと！！　20：00就寝。夜中小用でテントを出て、都会にない暗闇と沢の流れの音だけという静けさを味わう。今の一般社会にはこれがない。

8月7日（快晴）

起床4：10　五目御飯の弁当を詰めて出発6：15。魚止の滝は右側の急な巻き道を登って上部に出ると10mの滝を目前に見る。ここは右の急なルンゼを12～13m詰めて左にある踏み跡に入る。これがルートであるが、ルンゼを詰めて登高不可となり引き返すパーティーが多い。10mの滝の上部に出ると名勝滝の瀬13丁、岩床のナメの始まりである。流れが速いが浅い（3～4cm）のでフリクションをきかせて快適に進む。朝日が飛沫（しぶき）に輝き、キラキラ光る。まるで塗装道路のようなナメが続き、この世の景観とは思われぬぐらいだ。大きく左に曲がったところで美しい銀呆沢の滝を右に見て、左の本流の滝を巻くと、いよいよナメの本番となる。へつったり、岩床をどんどん進む。途中メンバーの1人がスリップ、小さな滝壺に転落したが事なきを得てホッとする。約2kmにおよぶ滝の瀬13丁のフィナーレは約10mの「最後の滝」、シャワークライミングで上部に出ると沢の景観は元に戻る。約1時間のナメの遡行であった。

オーバーハングの滝は左側に巻道があるが、約5mの垂壁がある。フィックスロープがあり、から身で登り、荷物を吊り上げて無事通過。40mザイル1本持参したが使用しなかった。　続く二股の滝は左右とスケールの大きな滝。左が本流である。真ん中の尾根に踏み跡があり直登するが、ここは約20m登って左に折れ、本流の滝の上部に出なければならぬ。真っ直ぐに登る踏み跡に行きやすいが、これは間違いである。この先は水量も小さくなり、クワウンナイ川もおとなしくなる。どんどん進み、お花畑の源頭に出たところで登山靴に履き変える。チングルマ、エゾコザクラ、エゾツガザクラが乱舞する実にのどかな源頭だ。何とも言えぬ満足感が漂う。右側に恰好のテントサイトがあるが、時間も早いので縦走路のある稜線手前約400m、左手下方の雪渓の水を利用するお花畑に囲まれたテントサイトに幕営。到着13：15。小休止のあとサブザックで快晴の中をトムラウシ山往復。山頂着15：25、テントサイト着17：55。メインエベントを終えビールで乾杯。就寝21：00。夜は満天の星空だ。美しい！！

8月8日（快晴）

起床4：00。楽園のテントサイトのゴミを拾い、きれいにして7：05出発。縦走路に10分で出る。トムラウシ山を背に化雲岳に進む。途中ロックガーデンあり、日本庭園あり、歩いていて楽しい。今日は下山だけだと思うと力が抜ける。化雲岳にはコマクサの群落あり、30分の休憩。ポン沼を過ぎ第2、第1花園は続く好天のためか、沼地だが乾いていて歩きやすい。第1花園はワタスゲの大群落。長い長い下りの後天人峡温泉に到着したのは16：05。

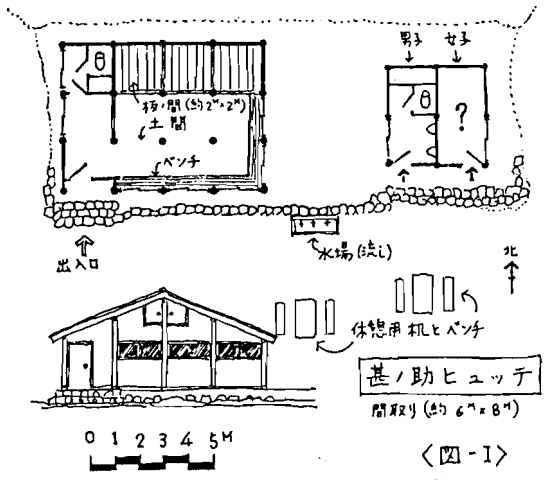
温泉に浸かり、ビールで祝杯の後一路札幌へ向かう。クワウンナイ川入口の駐車場周辺にテント4～5張あり。かれらもクワウンナイ川へ向かうのであろう。

白山山行

上堂竹壽

期　　間：　平成5年7月16日（金）～18日（日）
メンバー：　上堂、大島、西村

＜7月16日（金）＞　夏休みと梅雨の晴れ間を狙っての白山山行。大阪から名神・北陸自動車道を走り、福井北ＩＣから国道416号、157号線経由、途中白峰村でビールを仕入れて昼に別当出合着。南竜ヶ馬場のテントサイトを目指して出発。大島・西村は団体装備があるのでかなりのボッカ重量、ゆっくり歩くが甚ノ助ヒュッテまではきついアルバイトだった。ヒュッテはなかなか立派（図－Ｉ参照）水は勿論便所も真新しい。夏休み前の金曜日で登山者もほとんどなし。ここからあとは登りも少なく、室堂への分岐を過ぎるとトラバースをして、右に別山を眺めながらアオモリトドマツの美しい南竜ヶ馬場へ撞着。村営南竜山荘でテントサイトの利用手続きを済ませる。炊事棟・便所棟とも立派な設備が整っている。テントも全部で4張と静かである。さっそく炉端焼きで入山祝いの乾杯！　夕食は鳥釜飯となかなか贅沢、途中で採った蕗も茹でてビールのつまみに。外は星空だが雲の流れが早い。少し気になる。



〈図-Ⅰ〉

＜７月17日（土）＞　曇り空、早々に朝食を済ます。小雨が降り出したので急いで撤収。エコーラインを登って弥陀ヶ原、室堂へ。お花畑はまだ少し寂しいが、クロユリがよく咲いている。室堂もガス、荷物を置いて頂上へ向かうがガスと雨と風で何も見えない。御前峰、白山奥宮の社で休憩、グレープフルーツで喉を潤し、早々に下山する。室堂で天気の回復を待つも期待出来ない。観光新道を下る予定を変更して、往路に様子を見ておいた甚ノ助ヒュッテに泊まるべく黒ボコ岩コースを下る。昨日と違ってかなりの入山者に出会う。ヒュッテの一角を陣取りビールを飲みながらの昼食、外は雨で中は満員である。16時頃やっと我々３人だけとなったので、濡れたものを乾かす。快適な半沈澱。そうこうするうちにN山岳会の６人パーティーが入ってくる。雨で南竜ヶ馬場まで行かずにここで泊まる。深夜まで賑やかな人達、早々と寝た我々は鼾で対抗したようだ。翌朝お互い顔を見合わせてニヤリ！　強雨のなか未明にも雨やどりするパーティーがあった。
＜７月18日（日）＞　今朝も明け方から強い雨。朝食を済ませ暫く様子をみて小降りになったところで出発。別当出合までとばす。うまい具合に雨もほとんど止み、そのまま車で市ノ瀬・白山温泉の永井旅館へ直行。入浴料500円、浴室棟は新築早々で部屋も浴槽も檜の香りが初々しく快適。泉質はアルカリ泉で少しヌルヌルするが、透明で美しく丁度よい湯かげんである。雨と汗を一気に洗い落としサッパリしたところで、ビールとウーロン茶で無事下山の乾杯！
梅雨時の山行としてはまずまずの天気だった。早めに帰阪。そうそう今日は衆議院議員の選挙の日でした。

行動記録：

７月16日（金）曇り

吹田ＩＣ（７：30）－市ノ瀬（11：50）－別当出合（12：10）
甚ノ助ヒュッテ（14：50）－南竜ヶ馬場ＴＳ（15：50）

７月17日（土）小雨

南竜ヶ馬場ＴＳ（７：30）－室堂（８：50－９：50）－白山（御前峰）（10：20）－室堂（10：50）－甚ノ助ヒュッテ（11：50）

７月18日（日）雨後曇り

甚ノ助ヒュッテ（８：20）－別当出合（９：30）－市ノ瀬・白山温泉（10：00－11：10）－大阪千里中央（14：30）

特集　ＦＩＥＬＤ を拡げよう！

例その１　　渓流釣

45年卒　大島一恭

先日、奥田氏より「山」を取り巻く周辺の要素としての「渓流釣」について一筆まとめる様指示がありましたので、小生のつたない経験から「川釣とくに渓流の釣」に焦点を絞って雑文をまとめてみたいと思います。

渓流釣の世界は、文学的に香りの高いエッセイが井伏鱒二、開高健、山本素石等により書かれており、又海外ではウォルトンの「釣魚大全」が古典的名著として知られており、山と同じく文学的にも一つのジャンルを成している多分に精神的内面的要素の強い傾向があります。山にも書斎派がいる様に、渓流釣にも書斎派が多くおり、同じ様に文学作品等で充分楽しんでいただける世界でもあります。

が、小生は文学的な面からではなく、自然愛好さらには食欲の面から、釣に強く引かれておりますので、食欲を中心に釣の世界を紹介させて頂きたいと思います。

小生は海釣・川釣全般をやりますが、基本的にはいかに美味い魚を釣るかが一大事であり、食えない魚及びあまり美味しくない魚は釣の対象とはしておりません。特に川釣においては、中流域の清流での「鮎」・・・・但しこの魚は川の汚れに応じて味に大きな開きがあります。（尚スーパー等で売っている養殖魚は論外）。６月中～７月中旬の香りの高い鮎は塩焼にし、頭・骨・はらわたも全て食べられ、最高の味覚を楽しませてくれます。しかし、山女魚・アマゴに匹敵する美味さ、又渓魚独特の香ばしさもこの時期のみで、体の大きくなる８月頃はさほどでもありません。９月に入ると卵を持ち、又別の美味しさがあります。釣り方は餌釣・ドブ釣（疑似餌）・コロガシ（ヒッカケ）・友釣等あり、それぞれの面白さがありますが、友釣が最高だと思います。これは、鮎の縄張意識と闘争本能を利用した日本独特の釣り方で、10m前後の竿に 0.2～ 0.6号の極細の道糸の先にオトリ鮎を結び、鮎の居そうな石へ泳がせて、ケンカをさせ尻につけた３～４本のイカリ針にかかるのを待ちます。かかった鮎を次のオトリに使う循環方式で、非常にスポーティ・スリリングなゲーム性の強い釣り方です。（急流でかかると、竿は満月の様に、糸はビュウビュウと今にも切れそうに鳴き、鮎と一緒に流の緩い所まで川を何mもかけ下ります。）鮎がかかった瞬間頭の中は真っ白になり、

疾風怒濤の後タモに納まった二匹の鮎と西瓜の香りに深い充足感を覚えます。これにとりつかれ人生を狂わせた人間が何人もおります。釣期は6～8月の3ヶ月間で、9月の落ち鮎は主にコロガシにて漁のイメージとなります。川としては山間部の民家の少ない所ほど良く、清流に腰までつかり、里山をながめ、セミしぐれの中でオトリを引いていると暑さも忘れてこれぞ日本の夏との風情があります。私は京都府の美山川中流（由良川上流）をホームグラウンドにしていますが、人家のとだえる田歌地区の鮎が食味は最高と思います。富山市内の神通川にて、剱岳をながめながらの友釣は、数もよく上がり、なつかしい思い出ですが、食味はかなり落ちました。

さて本来の渓流釣ですが、山釣とも称し鮎と混在及び上流域の釣となります。餌釣が主（イクラ・ミミズ・川虫）ですが、毛針（テンカラ・フライ）・ルアーもあります。山女魚・アマゴ・岩魚が本州山間部（北海道では平地）の主な対象です。全て鮭鱒の幼魚で体側に大きなパーマークを持っており、すべてを含めて渓魚ともいいます。釣り上げた時のアマゴの美しさはたとえようもなく、赤い斑点がルビーの様に点在し、渓魚の舞姫とも呼ばれています。山女魚にはこの赤い斑点がなく、他は全くアマゴと同じなのですが、谷底の邪しい雰囲気がただよっております。岩魚はあまり美しくなく、細長い印象で暗い感じがあります。限られた川の源流部に生息し完全な陸封型と考えられています。山女魚・アマゴは降海型もあり、サツキマス等になるものもあります。分布としては、アマゴは本州神奈川県酒匂川以西の太平洋側及び四国の川、山女魚は九州・日本海側に流れる川、酒匂川以北の太平洋及び北海道（ここにはチップ・オショロコマ・イトウ等の渓魚がいますが、私は竿を出した事がありません）。これはあくまでも天然物の分布で近年放流が盛んな為、かなり混在している様です（養殖放流はほとんどがアマゴです）。釣期は解禁の2・3月頃から禁漁となる9月までですが、解禁時はまだ雪も残っており魚の体力も回復しておらず、数はよく釣れますが、サビが残っているものもあり（黒ずんでいる）、やせ細って食べて美味いものではありません。5月頃の渓（タニ）が最高で、新緑の渓流は何もかもが新鮮で、光り満ちあふれた渓を歩いているだけでも至福の時が過ごせます。夜明け前より釣り始め、陽が高く昇る頃には昼寝、ワサビ・ウド・タラ等の山菜取りと遊び歩いて飽きる事がありません。数はそれほど釣れませんが、油ののった山女魚・アマゴは渓魚独特の香りも高く、塩焼が最高の美味さを感じさせます。尚残った頭と骨は再度軽く火にあぶり、骨酒とします。岩魚は淡白すぎて、山女魚・アマゴ程の美味さはありません。しかし数の少なさという稀少価値と深山幽谷の雰囲気があり、これも乙なものです。私のホームグラウンドは先程の美山川の源流部で、京大の演習

林となっている為、開発の手ものびておらず美しい原生林が広がっております。ブナ・ナラの自然林とヤマセミ・カワセミの鳥たちとハイキング、バードウォッチングも最適です。釣場までは車止より2時間程の廃道のトロッコ道を歩きますが、20～25cmの山女魚がよく釣れました（過去形。近年マスコミによく取り上げられ人も多く釣れなくなりました）。一日釣り上がり、ビヴァークして焚き火をしておりますと、山・渓に居る喜びがアルコールとともにしみじみと広がり、なかなか良い所です。尚ここは、山女魚が天然で、放流のアマゴと滋賀県側より持ち込まれた岩魚が時々釣れます。信州・岐阜も釣り歩きましたが、放流が多く奥までつめてゆくと岩魚となるので余り面白くありません。しかし鄙びた山奥の釣宿で同宿者や宿の主人と酒を酌み交わす面白みはあります。

渓流釣は、鮎釣ほど体力と道具も必要でなく、沢登りのスタイルでやれますので、森林浴・探鳥・味覚の面から皆様も一度やってみられたらどうでしょうか。興味のある方は私まで連絡下さい、同行させて頂きます。尚比良高津小屋には岩魚がおりますので、つかみどりだけでなく、竿でも一度試みてみたいと思っています。

例その2　第一回バードウォッチング

西田すみ

期　日　：　10月3日（日）くもりのち雨　　（注：西田氏夫人）
案　内　：　島川勝氏
参加者　：　藤本、山辻、上堂、大島、西田夫妻、西村夫妻、尾形夫妻

「よう肥えとるなあ。焼鳥にしたらウマイで！　グワーハッハッハッ」
このようにしてバードウォッチングの会は始まったのであります。稔田の上を飛ぶスズメは確かに良く肥えてふっくらとしています。

場所は近鉄京都線新祝園駅から木津川に向かう田園地帯。「スズメはどこにでもいる鳥だが、その飛び方や大きさをしっかり観察するように」と案内役の島川氏。田の傍らの水路でセグロセキレイが尻尾を上下に振っている。スマートな姿に白と黒の対比が美しい。その横の畑でコチドリを発見。ツ、ツ、ツとあちこち歩きまわる様子がかわいい。島川氏、持参のフィールドスコープにコチドリを入れてくださる。みんな交互に覗く。双眼鏡より数段鮮明に見える鳥に「目が愛ら

しいナア！」と感嘆の声しきり。目の縁の金色の輪がくっきりと認められ、パッチリ眼のコチドリちゃん。

木津川河川敷は穂芒と葦が丈高く繁り、足元には川原撫子が咲いている。トビが2羽、対岸にじっとしているのを発見。「床の間の置物みたい」。私達が河川敷から堤に上がった時には頭の上を幾度も悠然と舞ってくれる。ツバメが1羽飛んでいる。南へ帰るのを忘れたのでしょうか。木津川沿いに堤を歩き、モズに会う。田の杭の先に止まり尻尾をクルクル廻している。右を向き、左を向き、見られているのを知っているかのようにポーズをとってくれる。フィールドスコープに入ったモズは金茶の胸が美しい。鋭い嘴と目に黒いマスクをかけたような過眼線はギャングのようでもある。「キーキー」と鳴いて飛ぶ。「あ、今度は柿の木の先に止まるぞ」と皆さんすっかり双眼鏡で鳥をとらえることが上手になっている。「他の鳥の鳴き声を真似するから百舌鳥」と島川氏。ケリの群がキキッキキッと鳴きながら頭上を旋回して通り過ぎていく。

赤っぽい稲穂を見て、この稲はもち稲であると教えられ、休耕田があれば農政について解説があり、セキレイの仕種を見て古人はセックスの所作を知ったとか・・・まことに興味深い話を聞きながら、無花果が香りを放つ道をゆく。

木津川の支流山田川に近い荒神塚池。池の中の小島が今日のハイライト、ゴイサギのコロニーなのです。夜行性のため昼間はブッシュの中でじっとしているので、そこにいると教えてもらわなければ見つけられなかったでしょう。ゴイサギの幼鳥は褐色の体に白い斑点模様の保護色の為なかなか見つけられなかったが、見つけたときはとてもうれしい。50～60cmくらい、背を丸めたずんぐりむっくりが4羽もいたのです。池にはカイツブリ、カルガモも泳いでいる。そして、声あり。「鴨はおいしいヨ」。紳士たち、お腹がすいてきたようです。

島川氏宅でお昼をいただいたのが午後2時はだいぶん過ぎていました。島川夫人心尽くしのおでんと焼肉（焼鳥ではない！）をいただきながら『鳥あわせ』をする。皆さんなかなかの記憶力を維持されていました。21種を記録。かくして楽しく愉快な第一回バードウォッチングの会は大成功の内に終わったのでした。

色々お世話いただいた島川氏、欠食児童のような紳士淑女達に昼食を用意してくださったご家族の方々ありがとうございました。

認めた鳥：　ゴイサギ、チュウサギ、コサギ、カルガモ、ツバメ、モズ、
コチドリ、カイツブリ、アジサシ、ヒバリ、ツグミ、トビ、
キジバト、ドバト、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ムクドリ、
カワラヒワ、スズメ、ハシボソカラス、ケリ　　以上21種

例その３　ケイビング初体験記

奥田　寛

期　日　：　10月23日～24日
場　所　：　「河内風穴」（滋賀県犬上郡多賀町河内）
参加者　：　古森氏、勝島氏、松尾氏（女性）、岡本氏（女性）、岡本氏の弟、岡本氏の夫（ Ramon ）、村上氏　以上市大探検部ＯＢ及び関係者
奥田、尾形夫妻

昨春、勤務先に配属された新入社員＝古森氏が市大探検部出身でケイビング専門家と知り、顔を合わせる毎に「連れて行け」と、せっついてきた。そして、ようやく一年越しで実現した次第。

未知へのふくらむ期待で仕事そっちのけの興奮は久し振りのことになる。現役時代に「洞窟探検」（筑摩新書）を読んで関心を持って以来、機会あればと願っていただけに、ついハシャイでしまっても、それはわかってもらえると思う。

さて、10月23日、ＪＲ彦根駅で午後３時15分、古森氏が私と尾形夫妻を車にピックアップして、いよいよ現地へ向かう。午後３時45分、「河内風穴」管理棟に到着。５分歩いてテントを３張設営し終えたところ、間もなく雨が降り出す。

10月24日、入洞日であるが、雨止まず。決行有無を気にしていたが、洞窟の中に入れば天候は関係ない、と全く気にしていない。午前８時半、観光洞入口から入洞する。古森氏と我々３名で先行スタート。他メンバーは昼食の弁当作りで後れて出発となる。

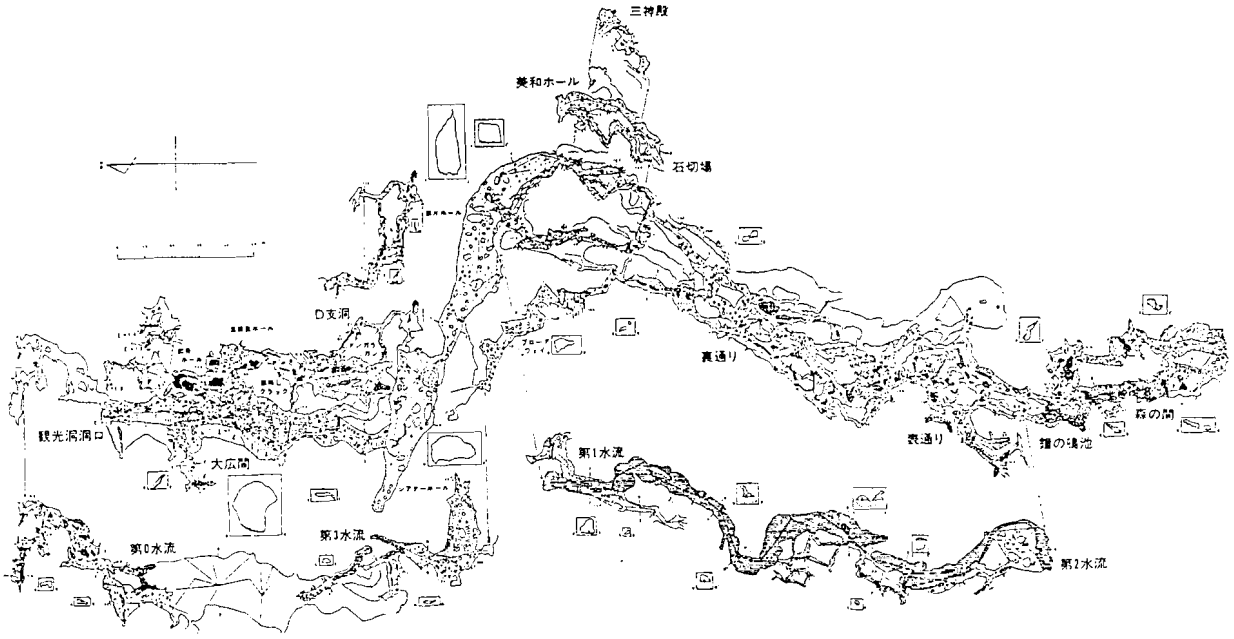
観光洞が終わり、いよいよ出発！と胸はずませる。ところが早速、最難関が待ち受けていた。極端に狭いため、胸がつかえて身動きできない。「ヘルメットが入れば、通行できる」との格言（？）が披露され、30分格闘して通過した事例を紹介される。まさか、やってられない、と必死にもがいて５分後、何とか抜け出ることができた（他メンバーは、さほど苦労せず通過するとは、何たる事か）。帰途、この箇所を通過できるのか、との不安を抱き乍らも、前進あるのみ。

Ｄ支洞からシアターホール、ドリームホール、第一水流、最奥部へと迷路の中を歩伏前進したり、ゆうゆうと背筋を伸ばして歩いたり、攀じ登り降りしたり、の繰り返しとなる。見事な石筍や冬眠中のコウモリを見ながらの展開が続く。直進距離で500ｍとのことであるが、サッパリ距離感がつかめない。

無事、出洞したのは午後２時10分である。早速テント場付近の沢でドロ落としに注力する。他メンバーは午後３時半、出洞。午後５時帰途につく。

つくづく、ヘルメット・ヘッドランプ・ニーパット（膝当て）が必須と痛感する。

ケイビングは大変面白かったが、通行困難な狭い箇所だけは御免こうむる、と痛めた胸をさすり乍ら、思うのであります。



山岳部回帰のススメ

和田城志

いつまでも部員のままの僕が言うとイヤ味になるかもしれない。しかし、多様は進歩の培養器だから、少しくらい畸人がいても許してもらえるだろう。山岳会員は山岳部ＯＢ（ＯＧ）だからオールドぶるのは結構だけど、山登りは現在進行形のものだけを指すので、懐古のグラスにいくら年代物の良い酒を注いでも、その快楽に酔うことはできない。そこで十分に熟成した登山家を紹介して会員諸氏に山岳部を想い出してもらおうと思う。

「黒部の衆」という山岳徒集団がある。黒部川流域の岩場を中心に開拓してきた有名クライマーのサロンである。私も今春入衆を許された。私の黒部狂いも岳界で認められた訳だ。代表の大野明は還暦を過ぎた親分肌の好人物で、かつて奥鐘山や大タテガビン、剱岳に多くの記録を残した直登会のリーダーでもある。しかし、衆の顔は何といっても渡辺斉（元東京岳人倶楽部）である。彼は54才。数年前に本田技研を退職した。離婚もした。前歯が数本欠けているが。金がないのか、今さら自分に投資するのが馬鹿らしいのか、一向に治そうとしない。給与所得者だった頃でさえ、彼の登山密度は驚異的だったから、現在の生活は推して知るべしだ。全ての余暇は山の中だ。谷川岳などは全てのルートを２度づつ登っている。日本中の山々に彼の足跡がある、と言っても過言ではない。

しかし、彼の本領は退職後にあると私は考えている。体力の低下、地位と金は失った。希望はないし夢想ばかりが一人歩きしている。東部カラコルム、リモⅠ峰初登頂、冬の日高山脈での遭難、厳冬の黒部白龍峡の横断、黒部別山中尾根の完登。登攀の中身では彼が60年代に拓いた、衝立岩正面岳人ルートや、大タテガビン南東壁岳人ルートに比べると少し見劣りするが、その覇気はいささかも衰えていない。いまだに継ぎ接ぎのキスリングで闊歩する依怙地さには頭が下がる。

彼の登山は歳相応に体力相応にやらないところがスゴイ。過去を誇らず、今を語るのがいい。サロン好きで、酒が好きで、激情一徹、山を語れば止むところがない。上州県境全山縦走、越後駒郡界尾根初登といわれても、私にはさっぱり分からない。元来が積雪期岩壁登攀が中心の登山であるが。若い頃から暖めてきた冬のローカル低山ヤブ山に現在のターゲットを求めているようだ。その一途さは自他供に認める山極道の鑑である。

かつて、大学山岳部がヒマラヤに初登頂の幻想を夢見、社会人山岳会が巨峰の

バリュエーションでヨーロッパアルピニストを模倣した。両方とも華やかに宣伝した程の中身はない。それは登山を組織するものと考えたところに問題があったからだ。登山は常に個に帰すものである。現代のヒマラヤ登山が証明している。

渡辺斉はザイルは組むし、集団で登山もするが、その軌跡は彼だけのオリジナリティで貫かれている。今西錦司は登山センスにおいて渡辺斉に及ばないが、似た所がある。曰く、偏執、依怙地、一徹。集団を作り、リードするが集団的登山を好まない。そこに持続する力の源があるように思う。

私は部室に初めて入った頃、まだアルピニズムを知らなかった。合宿と個人山行で技術を学び、本でヒマラヤに憧憬れた。だが、それらは山登りの表皮にすぎない。本質は雨の藪コギの、風雪のビバークの、岩壁のミシン踏みの刹那の中にある。アルピニズムの快楽は結果（初登頂）にあるのではなく、過程（いかに登るか）にあるというのは明瞭な真理である。山岳部員とはそのことを知る者のことだ。

整備された登山道を標識どおりに歩いて何が面白いのか、家族連れでカンビールをひそませて何が美味いのか。ゲレンデスキーの後の温泉のどこが気持ちいいのか、ゴルフなどという堕落した不自然を楽しむ神経がわからん。そういうことは一般の無知なる大衆にまかせておけばよい。

雨の一の倉沢本谷をつめるだけでは相当の覚悟がいる。大峰の小さな支沢もいい。冬毛勝の単独行もいい。とにかく人跡の匂いの少ない場所をゴソゴソ登るのがいい。山岳部時代は皆そうだった。山岳部の快楽を青少年だけに与えておくのはもったいない。岩壁の恐怖と藪の不快と風雪の不安とボッカの苦痛と生活の心配と配偶者の心変わりとナルシシズムの嫌悪と、こんなことしてええんやろか…と、完登後下界を飲むビールに熱燗、何物にも代えがたい快楽である。

一度だけ渡辺斉氏の自宅に伺ったことがある。玄関に歴代使用のピッケルがずらりと飾ってあった。木製シャフトのシェンクがあり、門田があった。居間は山の本や地図、報告書、写真、山道具が所狭しとちらかっていた。初老、熟年、中年、一切合切の孤愁が漂う中で明け方まで酒を飲んだ。

今西錦司や渡辺斉は度の過ぎた畸人だが、我々も少しは見習わなくてはならない。山道具を手入れして部屋を飾ろう。地図を見よう。そして山に入ろう。ドライブやゴルフなど論外だが、スキーや渓流釣りもすすめられない。山小屋はビバークに劣る。アルピニズムの孤高をかいま見た自負を忘れず、山岳部部室の扉を今再びたたこうではないか。

やっぱり僕は少し変かなあ。

《会員消息》

藤本　勇

昭和37年卒の小倉哲也君の住所が長らく不明でありましたが、この度の会員名簿に載っていましたので、手紙を出したところ、次のような便りが来ました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

藤本　勇様：

お久しぶりですね。お手紙の表書きにＩＳＡＭＵ　ＦＵＪＩＭＯＴＯとあったので、『山岳部にこの名前の人が居ったけど、まさか。一体誰やろ。』とつぶやきながら封を切ると、なんと驚いた事にマサカのアンチャンとは！　こんな嬉しい事になりました。最近山岳会ニュースをお送り頂き、かじりつく様にして読んでいます。若き頃のカタリシスでしか無いとは知りつゝ、全霊が集中する思いです。

今夏偶々、市大理学部在職中に同僚だった小嶋助教授が私の研究室に滞在されており、往事よく夏山やスキーに同行したので、今でも話題に上がるのですが、彼は今年も夏山へ出掛けているとの事、うらやましく聞いています。私はメキシコへ来てもう20年です。メキシコ市周辺に5,000m級の山があるのに一度も出掛けた事がありません。此処に来て最初の年に、山岳部の先輩、サントリー・デ・メヒコ社長だった山本勝氏と山行を約束して果たせぬ間に帰国されました。それで、気がつけば20年という次第です。浦島太郎の話は本当だったと、今では信じています。当地グアダラハラ市は堂々と熱帯圏に入っていますが標高が上高地とほぼ同じで、1,600mほどあるのと盛夏が雨期と一致して、一番暑い時期に、夕方と夜明け前にスコール様の雨が降り、大変過ごしやすい土地です。

皆様に宜しくお伝え下さい。

《住所変更》

61年卒青島靖氏が転勤の為、下記に住所変更となりましたのでお知らせします。

自　宅：　〒921　　石川県石川郡野々市町字堀内７街区６番
サンブランニュー　Ｂ－202
TEL　0762－48－7403

勤務先：　〒929-02　石川県能美郡川北町字山田先出26番２
松下電器産業㈱　液晶部ＳＴＮ工場商品技術１課
TEL　0762－77－2930

★☆★編集後記★☆★

・和田氏の原稿を得て、図らずも今号は誌上にて異なる志向の表明というような形となってしまいました。皆さんは如何お感じでしょうか。
和田氏の原稿を読んで、数年前「夏は海へ行きます」との私の発言に、あるＯＢから「堕落するなよ」と叱られたことを思い出しました。耳の痛い言葉でした。

・奥田氏とご一緒した「河内風穴」、非常にエキサイティングでした。真っ暗の中で、方向感覚全くナシ。すぐに自分がどっちから来たのかもわからなくなるし（ホントです）、はいずったり、岩登りのようなことをしたり。案内がなければ生きて帰れるものかと不安になりました。聞けば、最・最奥部には素晴らしい壁がそびえているとか。洞窟探検家のロマンをしばし味わえました。

・会員消息の欄、如何でしたか。長く大阪より離れてらっしゃるＯＢ諸兄、何か原稿でもお寄せいただけませんか。お待ちしています。